源氏袖鏡

源氏袖鏡

東京文庫

龍田山光ん出し清音寺にいのりて夜半此國乃二戸
所そてきたし海より風とともに吹きいやしくして
和哥此浦よ四紙に移りてあまかれともちのれは事らく
そ住吉乃明神は申さこれにいて草あかく言の葉
なちいらはちらぬこれいとその里をもいひなくさ
むる徳のいさかたる佛氏の道いたくへし　摂津氏の
語は和哥は第一にてこれ國乃おしへならむ　志それにく
あられ佛法なるに　无量光佛とはいひあみ又は学者尊光
ならはいひ神道にて宗源の二字をうけ通るとあかし
あふ光をとめる人あひ奇まて神なる仏者にてまいは多識
ならはくあまなるて記しるし人やさかそくゝ
とそれいたるさいわい乃流にかきかけ言葉ふ本説あして
大井河あはすくれにきたよし出ぬけるかはらきたの里
あおかいえん道とた人てこの内ととしいさよいともかし
さはいつもの人なるとけん源氏小溪といふひとへきて

くりやる紀母世にあらし作らハ海つらにゐていさゐ成るる
やとなるへし さう條を今作りいひ川人にあり
いとゐれハ海ふかくひの事くさのそりの雑文をこたえて
なく書居く謝安さるれたるてふのことをやすくす仍てゆれ
と彼小説とはしめ給ひてふと今の世の人あれ人り
とて源氏物語を名つけ作るの並たる紀乃部をかし
補なきの従をおさむる例 夏ともりて炉をとす
あそてなくりて玄称ゐたもなるれいるてて事あるきを ふれ行し
乃みくひよりてあめ延見文 雑談乃發句をとくふうるゝ事とき
ありてかの中紀ゐ紀母世にふかてりしてあるきハ時ニ庭ゐして
佛の法法をとるせ事あるまりてつゝ作る 狂作者の
いふる紀集をとる事を記了乃う行きてまさて次句先に
次第よきつとりぬめ 狂作る源氏乃人々よきみつわるわき
と一句ありも 題号の事をもとさまれし作る事ゆえん
くるの事のいつ歌の給て作をて仏の絶若式部をは
家許に来られるむ事をとおりのあるへし

源氏物語

光源氏乃物語れいふ何んし此君の始終は
まるいはゆるは源氏物語といふ此君を云給ふと
いふかはきわてしつかの書れし七歳の御としにて
御文をよみ何てうえんしかれは琴笛れ吉
かと雲井をひゝし何事にも人にすくれてなか
まけ高麗の相人さたれ後に此君は桐壺
の御せ此君のひかるとやさしう何くしも見たしかれ
光てひかる君と名つけまゐらせこことにいふ之
源氏といふまハ河海抄にいはく源の姓ハ嵯峨の御子
信公よりはしめてまきにいはく代の天子の皇女二十
人の御子に源の姓をつけ給ふ物
とは万物といふ義なり語とは万物の理と演説する也

此題号は源氏のめくりあひきんけいさうしは源氏周易
までハけんじとしていふ儒者くハしんきんいちしん
の文字にもとつきたり発起ハ一条院の宮上東門院へ
めつらしき物かたりや候と尋させ給へハ宮女のむ
らさき式部にかくしてつくりてまいらせよと仰有
しかハ式部ハ石山寺にこもりて此事をいのり申しと八月十
五夜の月湖水にうつりて心ほそくおもひけれハまつ
すまの巻をつくりはしめけるとなりあかしの巻をもつくりたる
ても此かきつけ今夜ハ八月十五夜なりとおもひ
出くとうけ見式アルくハんをんの化身なりと云し

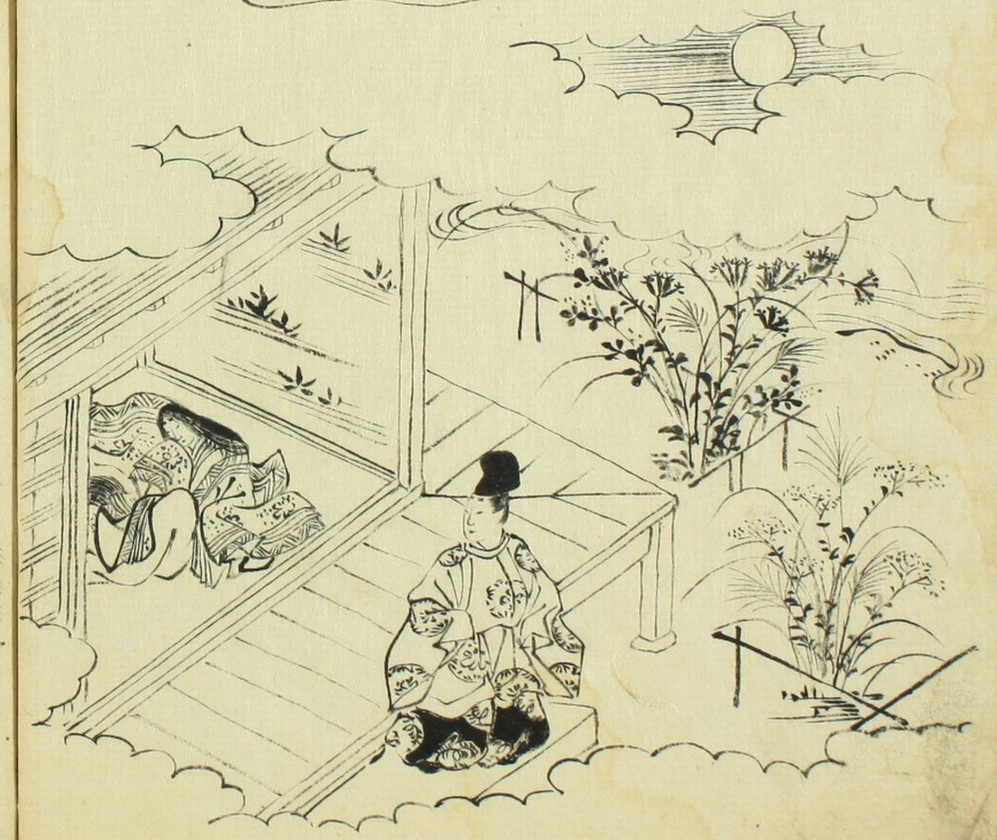
きりつぼ

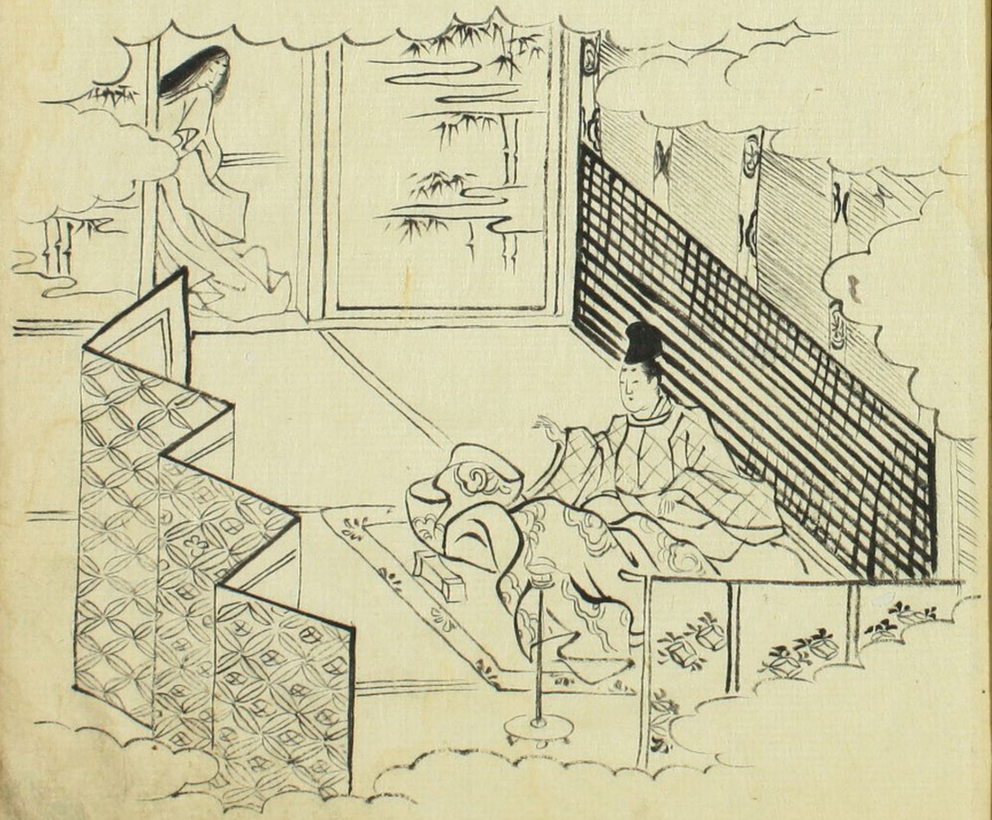
きりつぼといふ事ハ大内にある殿の名なり此きり
つぼに源氏の母すませ
たまひしゆへにきりつほ
の更衣とハ申し也
はしめ一の人なき人の
御むすめにておはしませは
父大納言にてうせぬはは
人の子なり御そうら
ひにておはしまして
こやつくるに仰ありて
此門よりはいらせ
すみけれハちかく参らせ
よしとてさきの后
源氏の君なり

松永氏貞徳

きりつほは
けめ花や
さいたり

荒木西氏守武





花乃ゑん

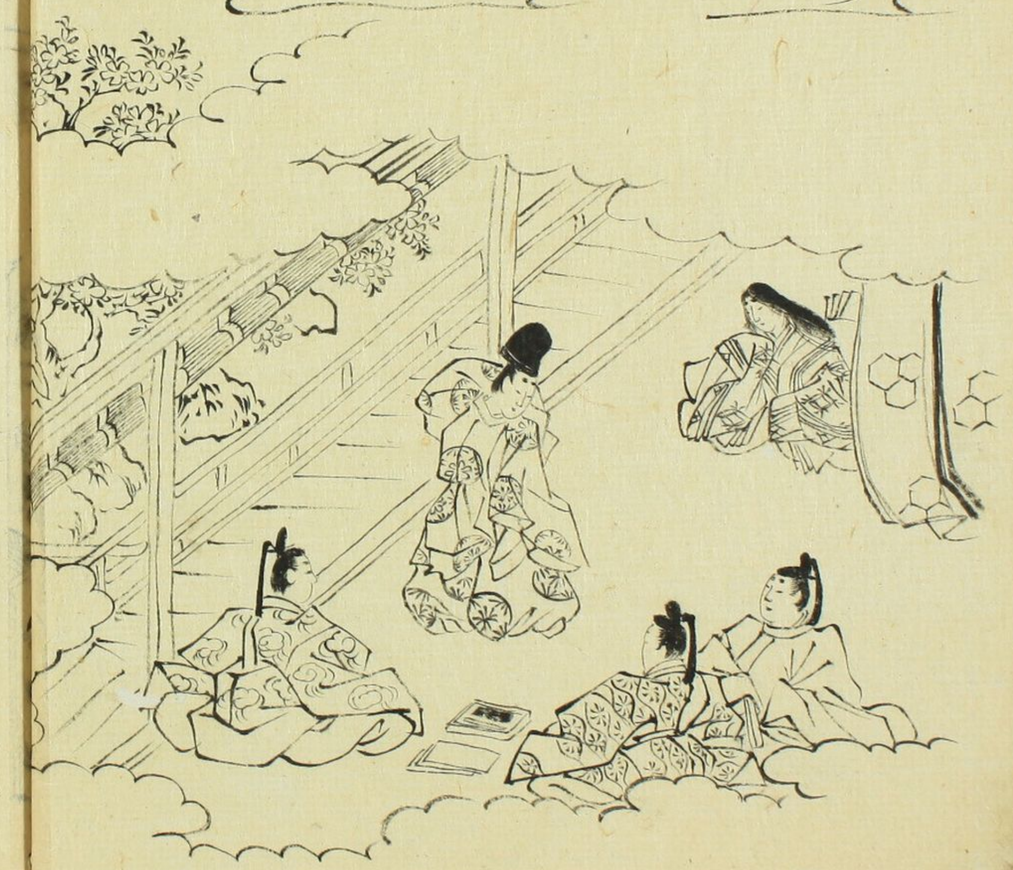
うすもちれいこのつき
のうちにれいこの大門よ
花乃ゑあつま屋敷のさ
くらちりかゝりて御殿
はりをあく花をなら
つゝて侍のとはくり
ゆふ子及ちまのうちの
のぶれ舞とおのれ
生ゑせちよせあさせの
源氏まひすつゝ花ハ柳
花蔕なり

雞冠井氏令富

花乃ゑんゝ

ゆしめてゆや

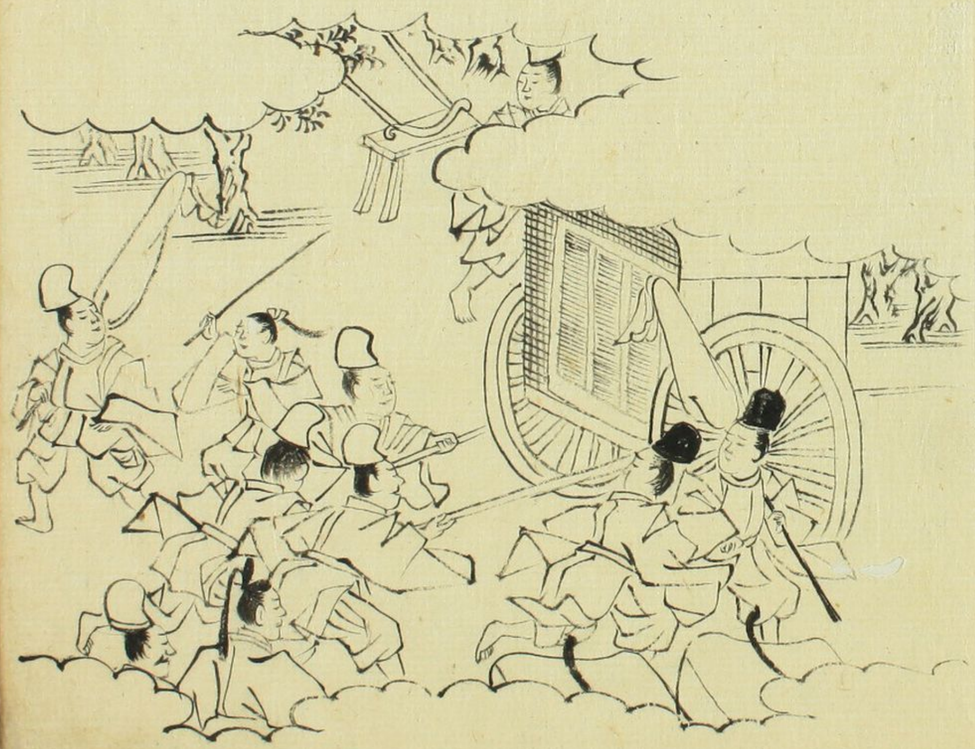
柳花蔕



ゆふ
ちまの流の一乃ちれ
ひめ子をれつきの宮ふ
そのりのつ子さ美い
うこのそ人て目をち
とろをあのひのと清ハ
るくさ花て出くにうん
すうた又大衆のゆをやし
きのひて出すた車れて
ふをくあるそひてゆをふ
のは車をうちをんるとせ
車あそんとしてゆをえ
笑花のようれをるを
ハあつひのつきとふ

博牡丹紀未慶文

柳乃ゆゝくもあふの
うへを紅

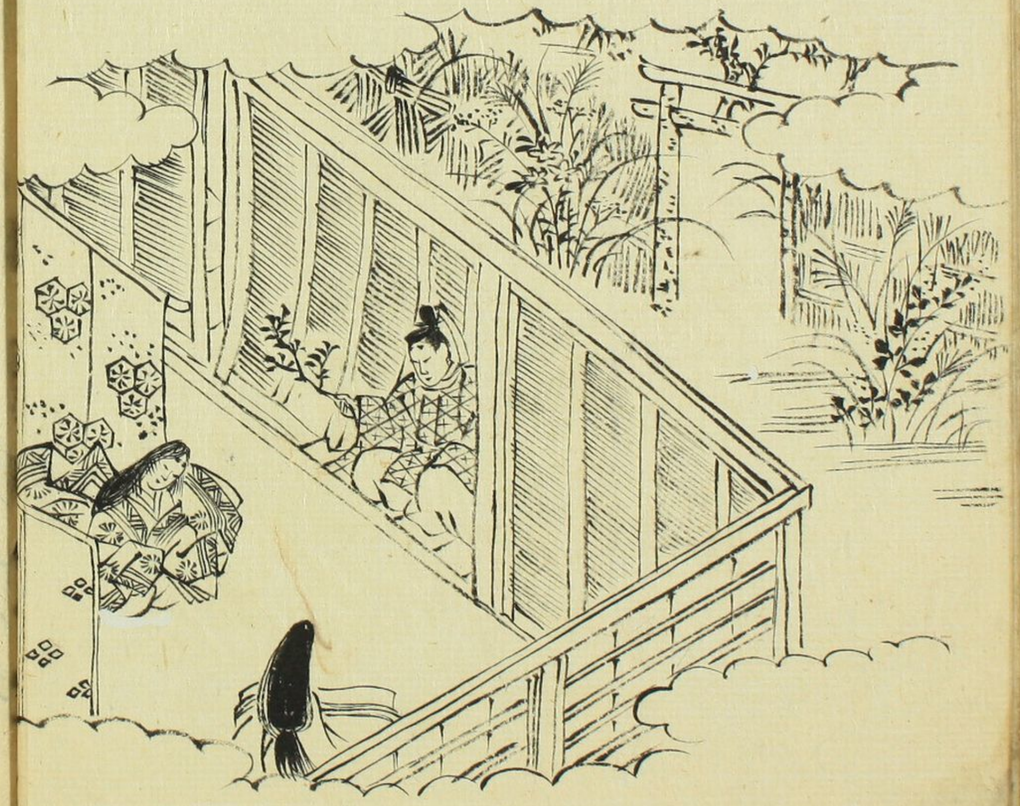


はう木

六条のゐんにて花出でゝ
めでゝ院より伊勢へ下りの
にまうきよりまして世話
よ位のつさもたかきもと
たてゝ給りて後の京へ源氏
まゐてかんさせれハ中の
好りう出しこまとり花
しつらひくるまの宿
神さびて出家のさま
をとゝのへもてなしてみもの
ゆゑさ今のハらやとを不
神花出の枝りる花と
いふまへてもまる柳を
とゝまるすいゆゑ

松江氏重頼

なびく柳乃花や
つるもの家

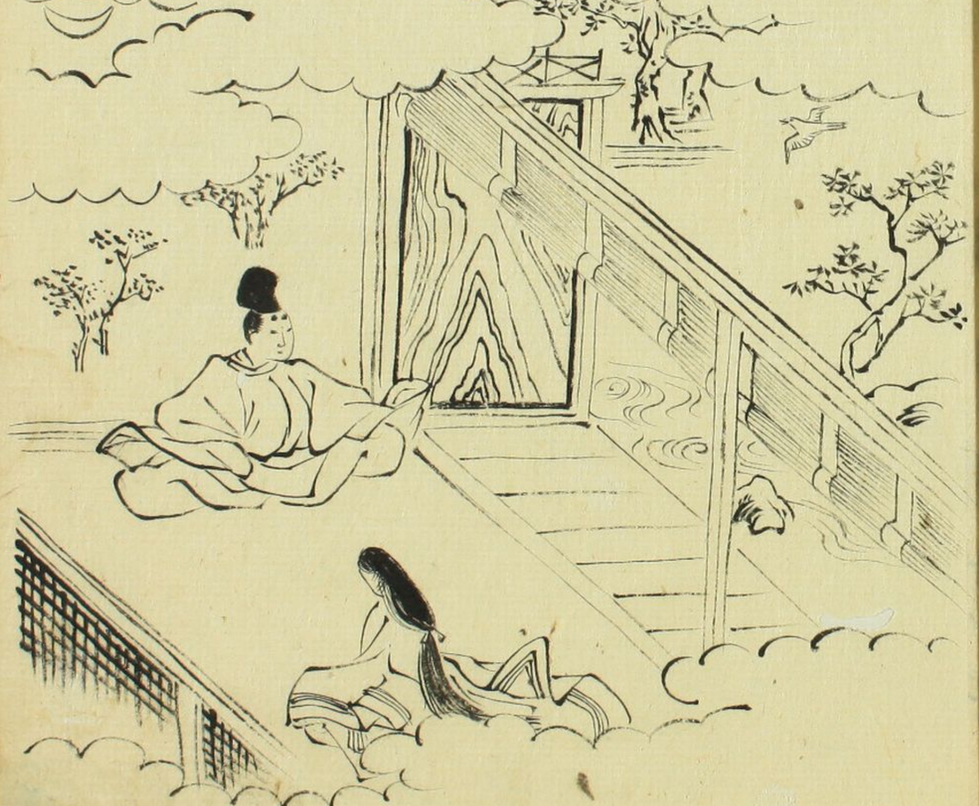


花ちる里

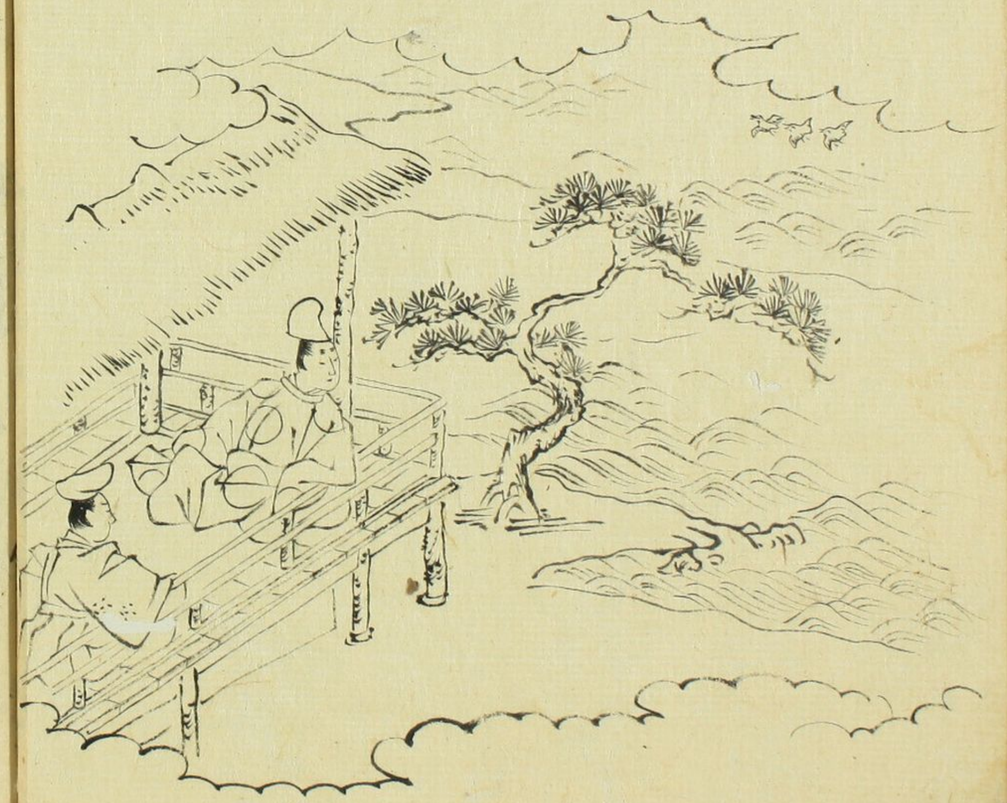
源氏中川のあ
うへ夕のもせゑ
やうのたてそたん
しまとるところ
あり京とゝて
いまのひとり
あちもれの
ちれうつし

ゆゝさ次

花ちる里を
うつしてしの
とし宗ゆへ京ま
ちの氏鄙哉
ちるハるとゝや
花ちるさとう



九十四



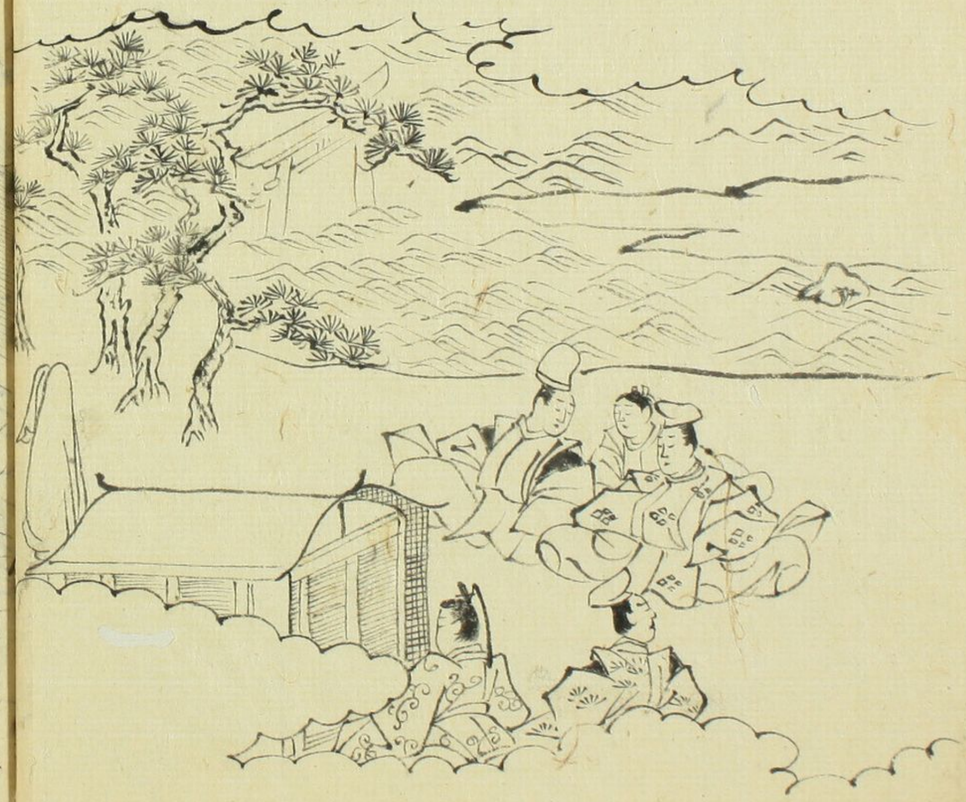
十四ウ

十一　みとはて

しまてこをつしてこそ
教ありてあるものなれ
ひとの紀よ行方と
はてしなきあらしの
おゆへ源氏物語
うきれて経るくるの
世信ゆわたたやめい
てのもとまてあ家
はくし信吉の弥れ
はちしいよんて秋の
はちあてあるものの
はてるしれそのうこと

沼ノ住未得

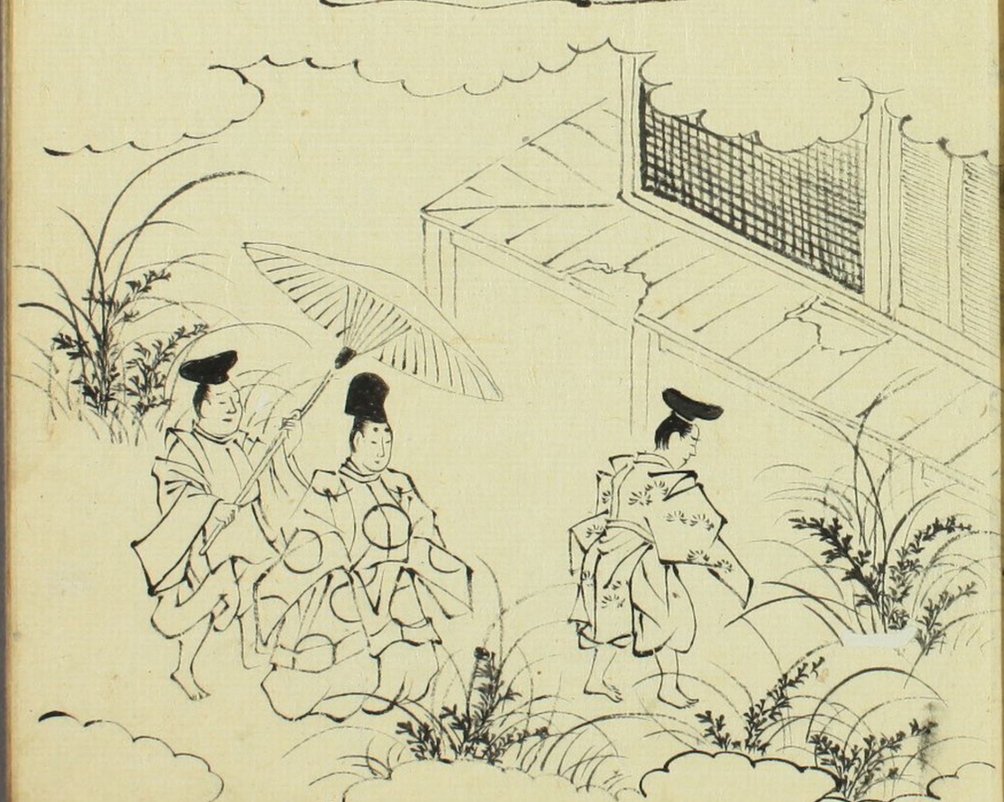
雑俗江の若略の
身をはてくしや



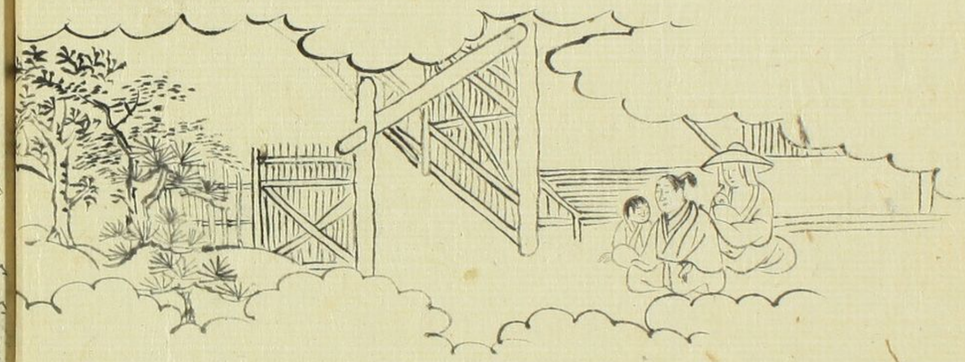
ふとさうこをてのうしの
すもつむ年にかやとろく
とるの紀女房文家の法
論をてかとるの信
吾をてはのへ与と源氏
物語のて紀るさの
はてしかりのあたこれ
の紀ふてうきむて
はるる古きあるそを
ひとの子を出紀人の
せいの〈今のて源氏
見てと紀てとそ
ふてるくふ紀すき
ふりのふとはを感

村ら氏今敬

ふさのすもつむ
彼をやきてはの



世尼屋ことゝ
源氏石山へまゐる事
考うつせしとゆへ人の
おのこゝろのみひとり乃
西目とかゝてゐるかゝり
て京へのぼる御山そ
わひるひとりか人をもて
苦ゆるとおゐ出て石
こゝろ知るゝ思ふし尔
天さまてを出のひく
昔のはんの知乃こゝ
とをてはなりたり
ゆるゝ人乃名ゆ
もゝ御屋とゝ
未吉氏道節
はなるゝ
つをせうやゝ



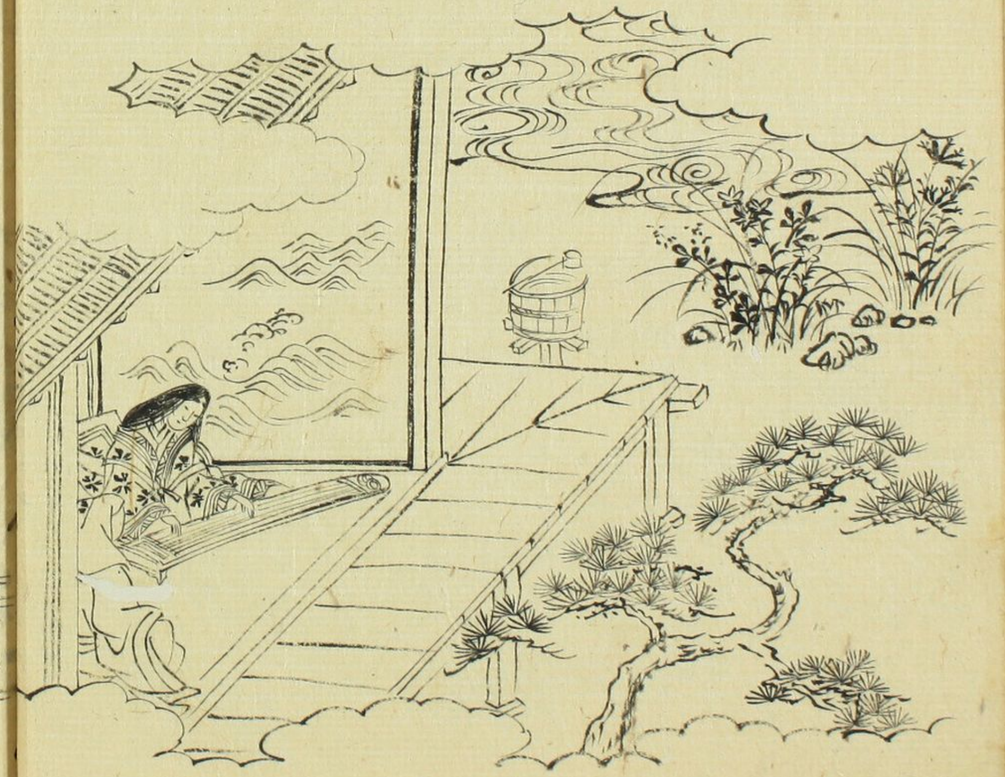
十二

忍わらん世

そ法のみとゝ
帝ゝ乃ゝ
絵とこのませゝ
やゝ十日法ゝ
乃ゝ
きて
こゝ
ら
ゝ
ゝ
ゝ

十三　松風

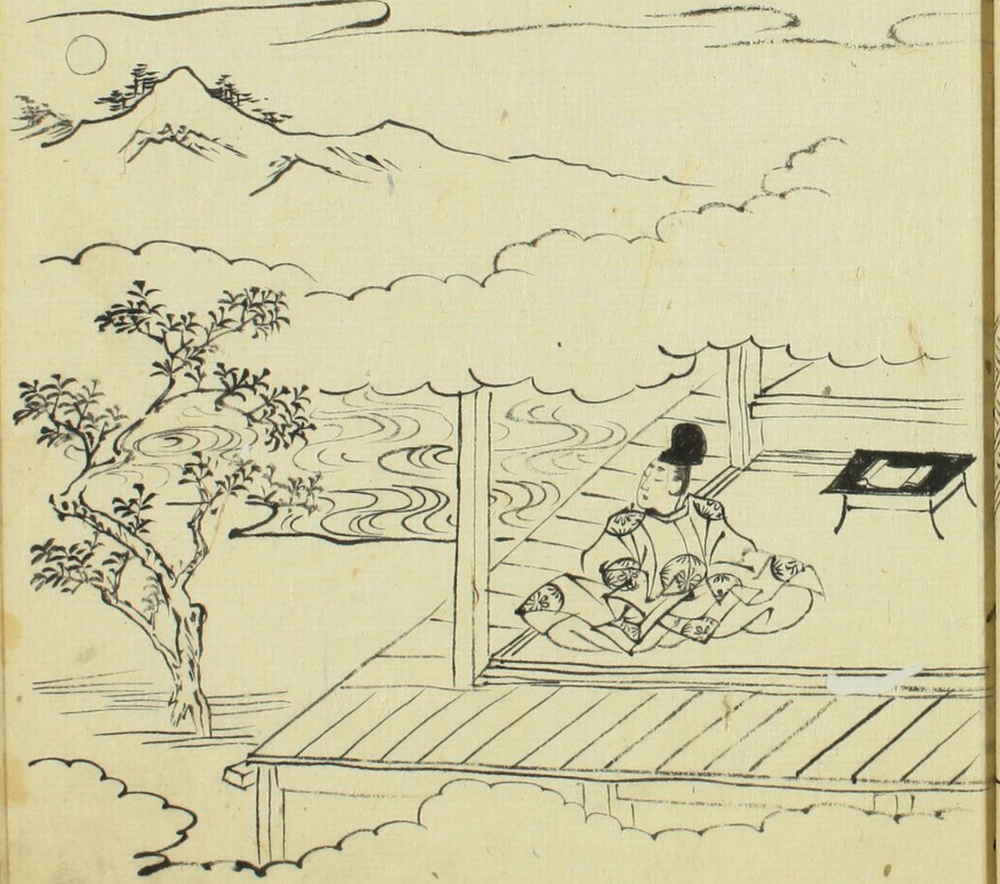
源氏ハ一さて出てゐ
給ふ事なれて一人のひ
ゑ出来させまゐらせ
給ふまゝにかゝ
ひとりおもひ
ゐ給ふ
海より京へのぼり給ふ
ものゝ大きれ給ふ
ものゝ大井川の
邊に行給ふ
松風さとり給ふ源氏の
ゐ給ふ
ものとゝ
山里に
松風
歌
花田氏交宣



十四　千里

ゐ給ふ
十八ものゝ
事ゝ
ゐて後源氏の
ものゝ

入日さす
海上
うゝ
海松ハ池
とゝ
高源氏元結
ゐ給ふ
ものゝ

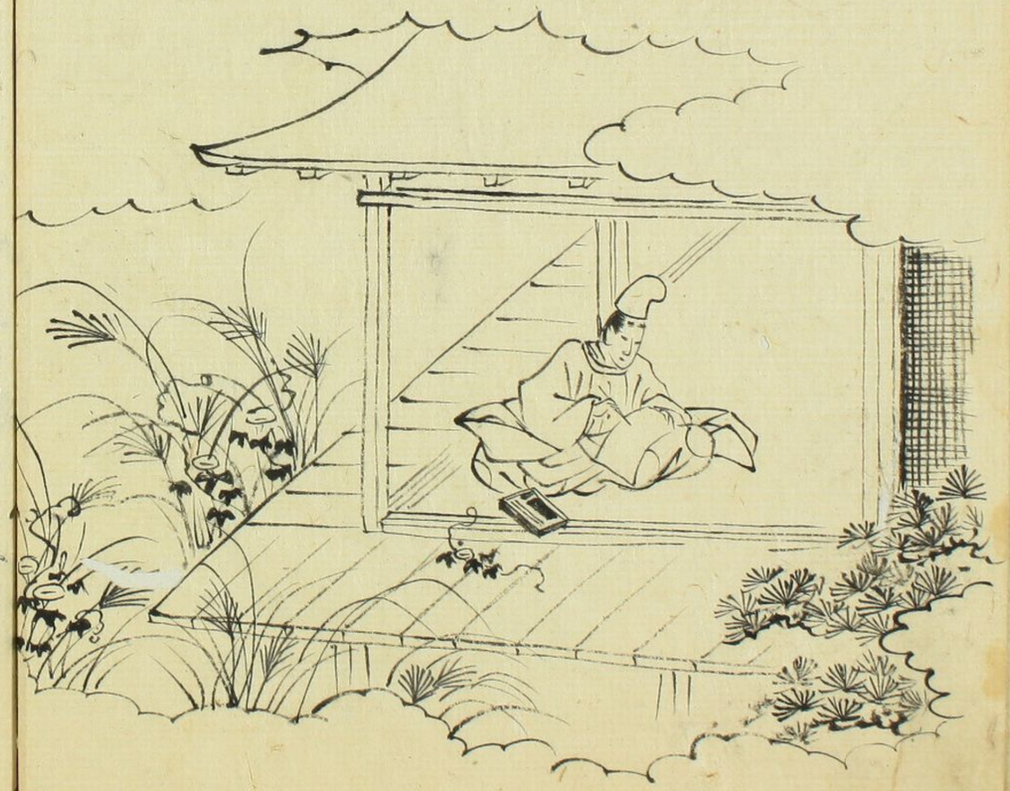


十五 あさうの母

あさうの乃御殿
ゆきさうふ
乃元めの家賀茂
御ようておりし
ちかのゆせをして
御殿とゆきうし法
京へ源氏の出家よ
り

ゆきの
家ゆきうを
ゆきの乃花の
ちかい
ゆきをあらんと
ゆきせうゆきを

和州新山住池田氏正敬
当時ゆやはと
ゆきわの
ゆきて

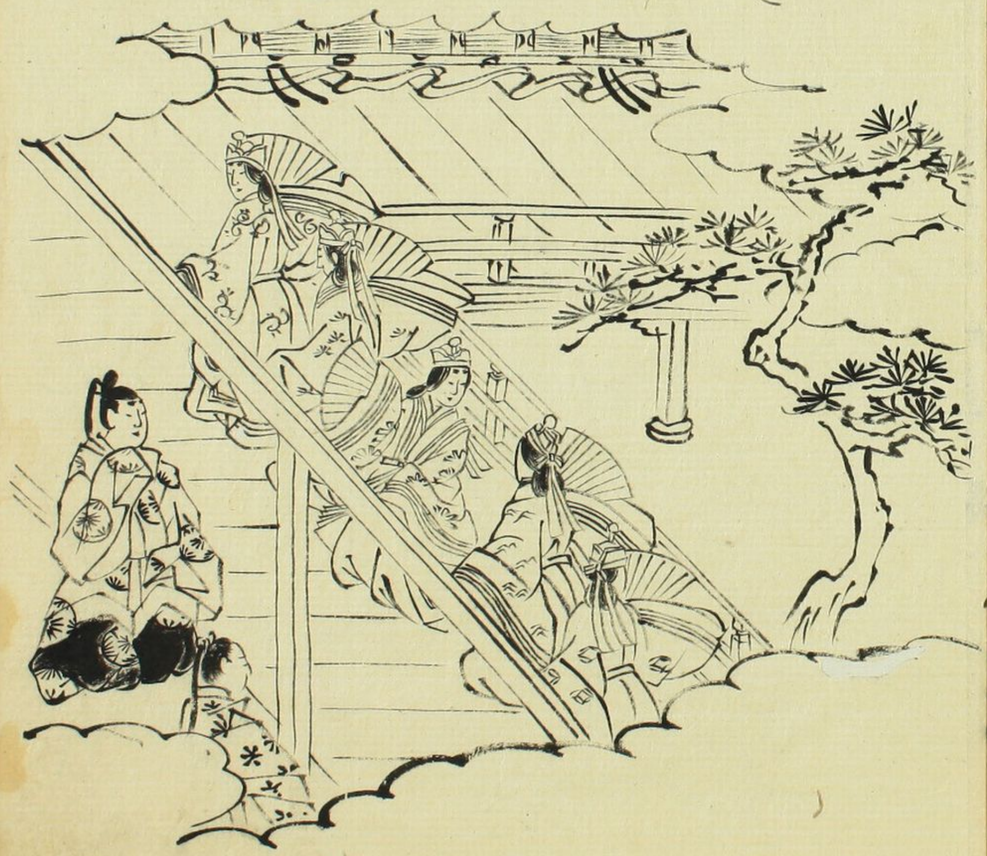


十六 とゝ丸

かゝ丸てんのようを
大内よりてゆきあはせ
ゆきふ法ハ十二月へて
ゆきうわ内のゆをそ
ろへて天人乃ゆきをに
出ゆきてゆきひゆをと
ゆを源氏ゆきあゆ事
ゆあのとゆ丸ゆうも
ゆあゆ出ゆをとゆん
ゆをハ昔源氏のゆく
ゆハせゆわ年ゆうしゆあを
ゆ丸てゆ新ゆてゆをゆ

乙女子ゆ弥ゆひゆ
神ゆゆ世の女
ゆゆひ乃ゆをハゆ
ゆをゆゆゆゆく

伊勢住望一匂當
春て白ゆかゆをゆあの
けゆうゆ



十七　むつ

むつ　ひめ

ひめ　乃

ひめ　の

ひめ　を

ひめ　と

ひめ　て

ひめ　ふ

ひめ　り

ひめ　き

ひめ　い

ひめ　こ

ひめ　そ

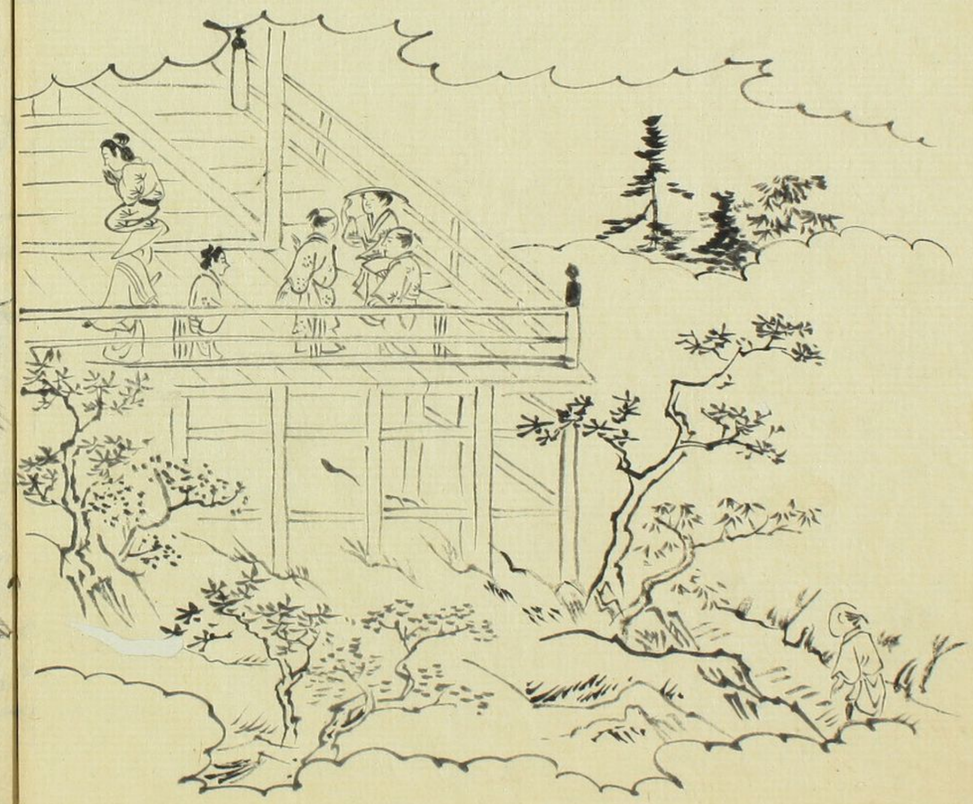
ひめ　む

ひめ　ん

安原武貞室

むつ　ひめ

むつ　ひめ



ひめ　ひめ

ひめ　ひめ

ひめ　ひめ

こてふ　むすめ

沢田氏由宮

ふる神の　ゆづるの

こてふ　むすめ

世平宮と　ふるの　ゆづるの

人の　ゆづるの　ふる

むすめ　ふる

ゆづるの　ふる

ゆづるの　ふる

ゆづるの

とこあり川むつのの
むつのの松せすゝ
とあるつといふそれ
方ゝ左にはなてゝ
をとゝのへてかゝ
鬘麦とゝのへうゝ
あわま夜ろ紙こわ
又おゝひめ君をあて
こ光かちゆふ松や
ひめをとゝこと
云源氏ゝ入せすゝ
なてこれ

とこあり川

色とゝ人ゝ
うさねを人や
とゝせのゆゆ

要法寺上人女房

そもちゝ
死の女

かゝり火

源氏むつゝと
にかのとゝ
ゝ松ゝ
おゝ首のゝ
尺をゝ
夜の夜ゝ
かゝれ
火をとゝ
させゝ

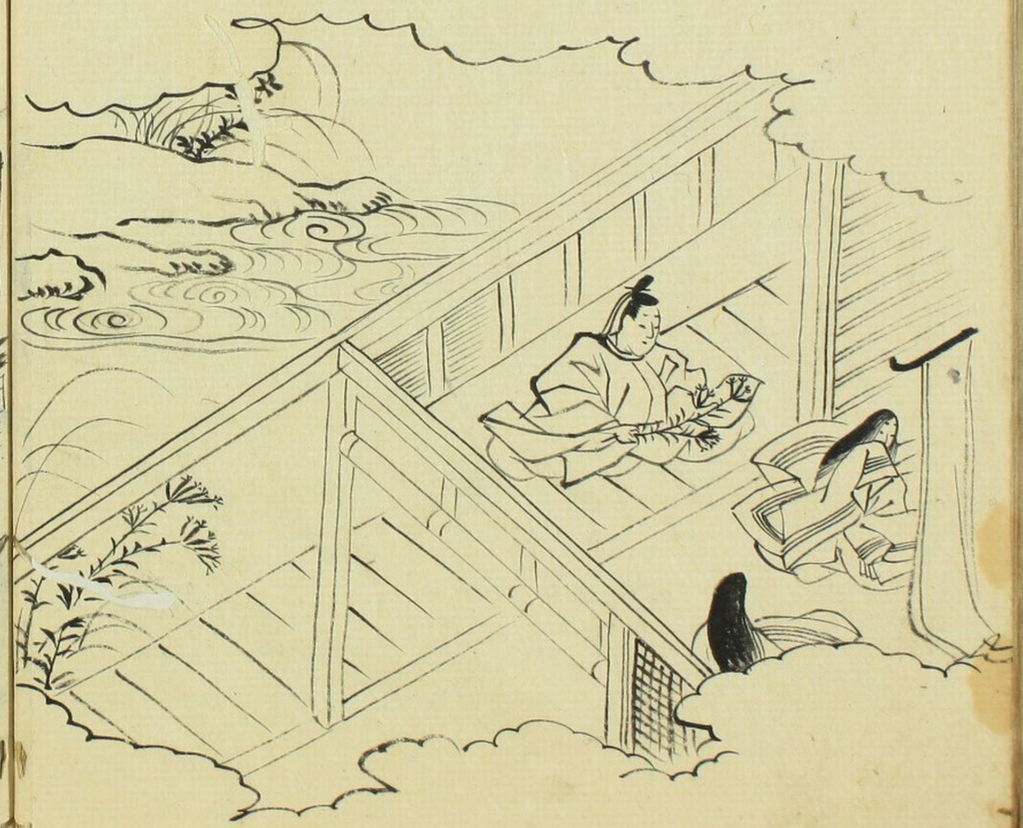
かゝり火

立ゝ
ゝ
ゝ

野口氏立圃

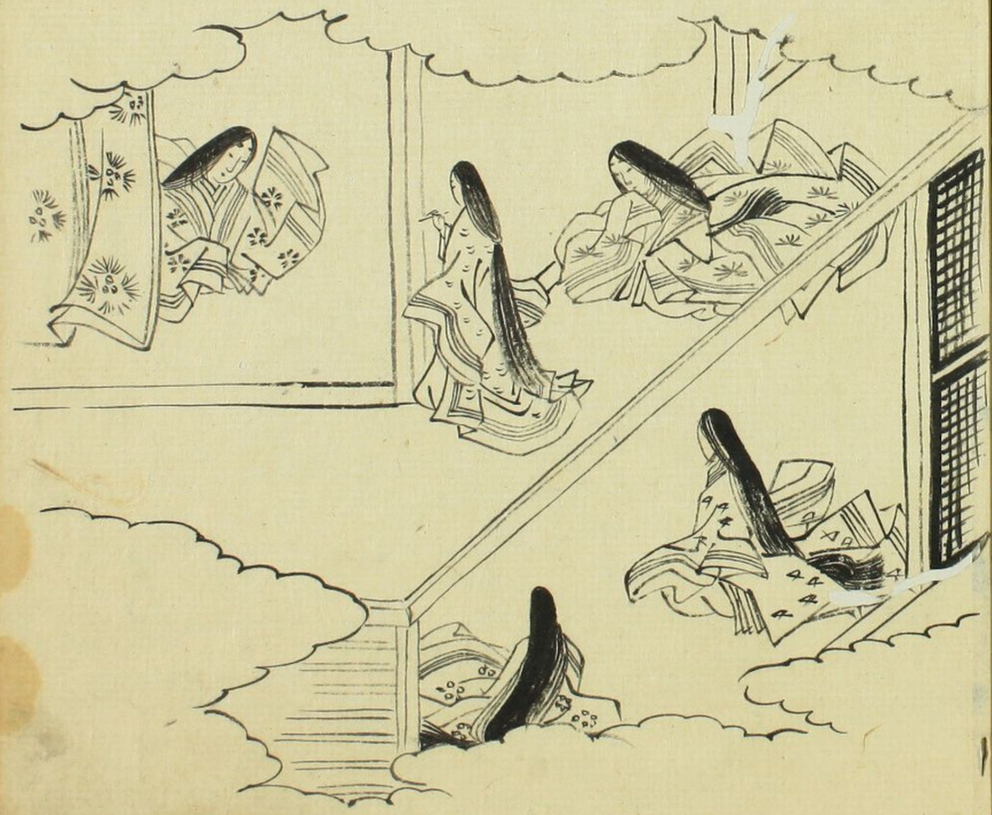
かゝり火

寺運町



服部武定清

源氏酒



喜閑軒自安

廿八 梅かえ

正月晦日此比源氏の
おとゞ此紫殿にて花の
香合せのあさかほの
斎院の御方よりちり
すきたる梅の枝に御文付
てたてまつり給ひけるを
宰相の中将の君ひた
つけて白きつゝみにたる
今梅を折てむすひ付
うた

花の香は ちりにし枝に
とまらねと うつらん
袖に あさく
しまめや

此哥ゆへに
蜂屋山田住光息書
梅かえハ我花さかや
きの筍

廿九 藤のうら葉

雲井のかりのひめ君を夕
きりの大将にとおもひて年を
へたる父ゆるしあらん御心
なきにあらねはゆるしあらん
ことゆへて此庭のふちのさ
かりに大将をよひ給ひて此藤を
見はやさんとの給ひて少父
おとゞ藤のうら葉とうち
きこえ給ふ詞よりおもひ
まかせ藤の花にかけて
うたひ給ひけるを

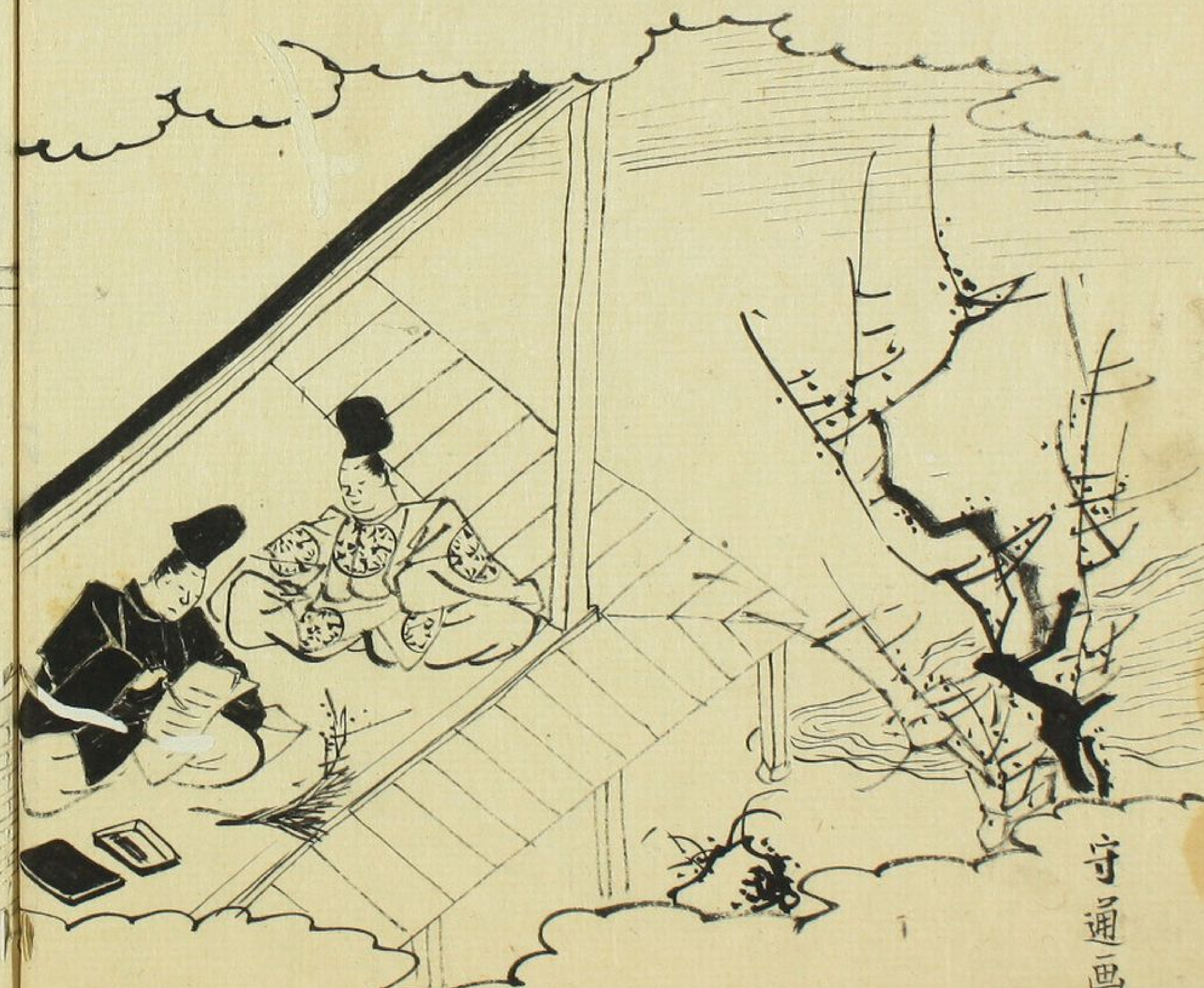
又おとゝ
むらさきにかことはかけん藤の花
まつより過てうれたけれとも

夕きりの返し
いくかへり露けき春を過しきて
花のひもとく折にあふらん

奥西氏友三

人ことに はれ かれ
藤咲 おゝのきけ きて

守通画



守通画

むつまじくもひけくらべの
はなやかなるをみまほしう
けれども月日はうつる源氏
院の出方へ急ぎ出立さ
ぬうちにとてうちつ
むうちつの所へ
あるべきの人小松
引つまそれの君
いのりつるを
六条院の侍所は
小松原さえのうひ
ひられてや無人の
ようにて主をつもれる
子たちのあそびこゑ
をうらやましがる

萩野氏安静

わるる下

光は人の来ぬ所にて
いとれいもしかるべき
さるべき女こそ
たまはめとて
はるの宮の人々
はてそうるけうの
君は六条院にて
人まに出でもあ
るべうもあらず
すきかこいつくり
ぬ所をひらかせ
くみ入れ給へ
今ちひさく
所のつぶれみ
さんのつぶれ
たるをもも
を源氏の君
と思ひ

清孝氏正伯

わるをつくせる
多いりる

十三章
草雀画

かつ八木

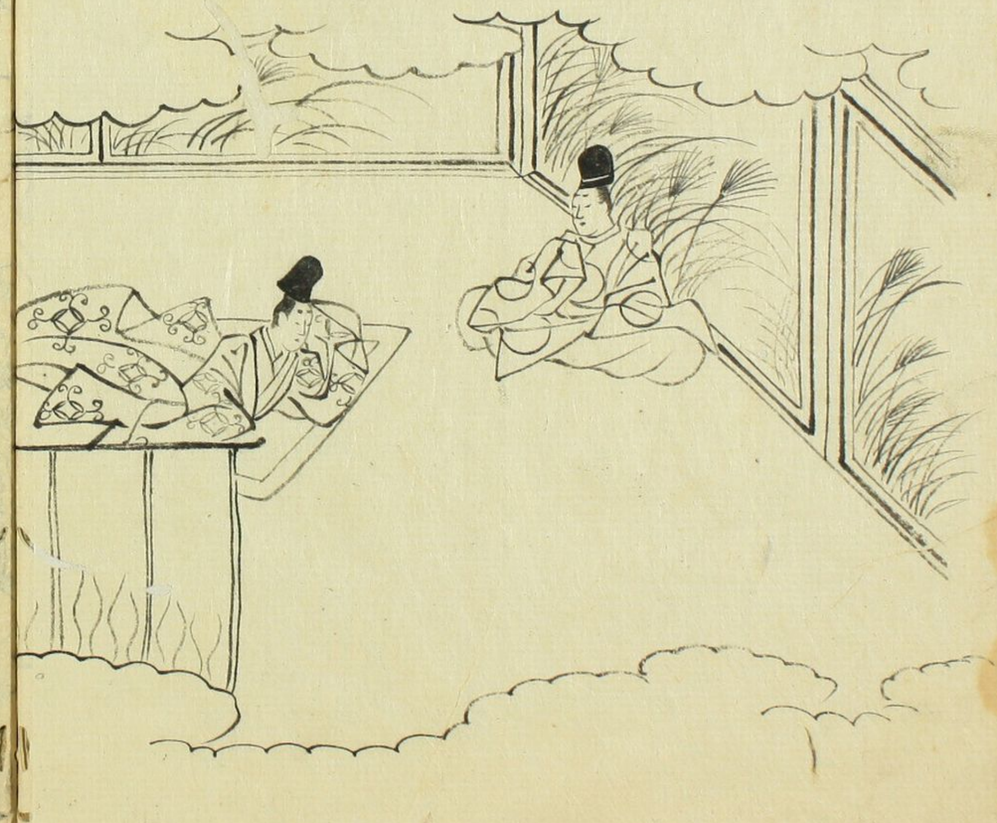
[illegible]

中河氏春宝

源氏酒

くもゐ

[illegible]



[illegible]

森田氏繁秋

吹風のうゐ

横笛や

中[illegible]

すもう

八月十五夜のあり
ろまみてりてらこり
ゐくわとまるれ六条
院八条乃宮へおつて
月をながめまろに酒
乃せんさつよそなれ
る虫たのゆ仁すまの
こゑやうに哀れ八条宮
大ゐの秋とおもひ
ふるさとを
源氏
つりて
とゐ
小野氏季吟
よこ
ふえよ
なるね
すもう

夕さつと
大ゐ小地
ひ御所
山星ハわれを
そろ
立ち
ひ
大ゐ小地
小地
小地
鈴冠井氏令清
久
おち

十三量
[illegible]画

廿五

源氏乃大臣

西村氏重俊

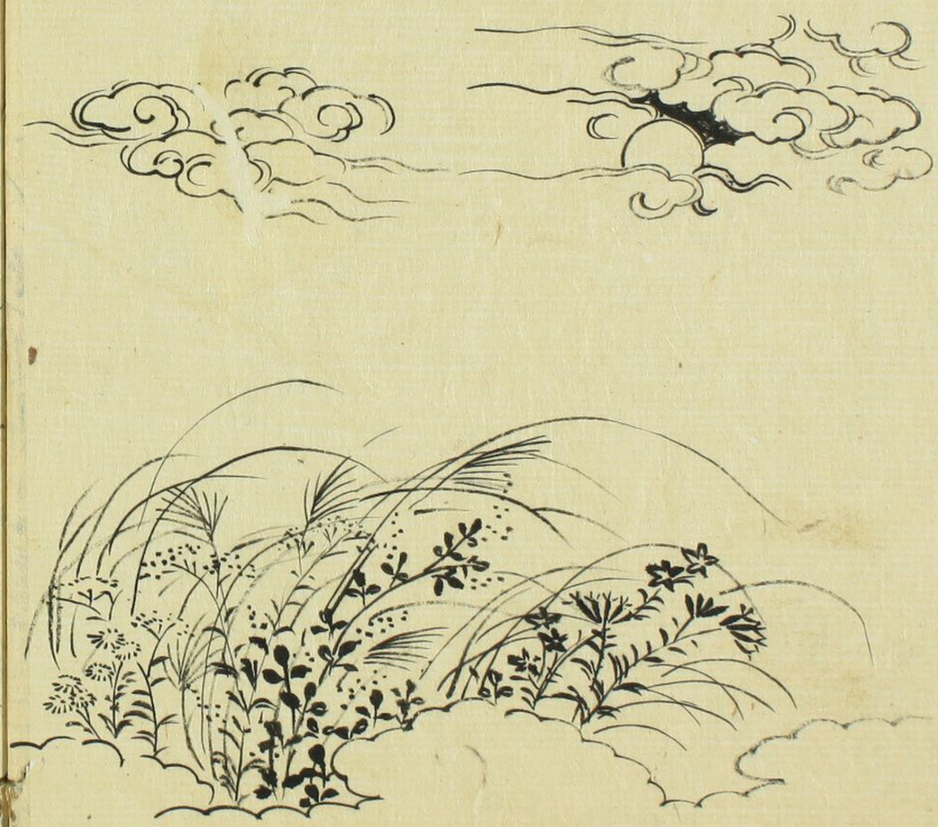
廿六 雲うれかくれ

雲うれ六帖ハ名ありて実ハ北水火風宣徽乃六ちふ也れ名神あり散失せれと神なれよ多と

うち云ふ　ひ[illegible]源氏とハ世ふ[illegible]くまれ[illegible]紀多[illegible]

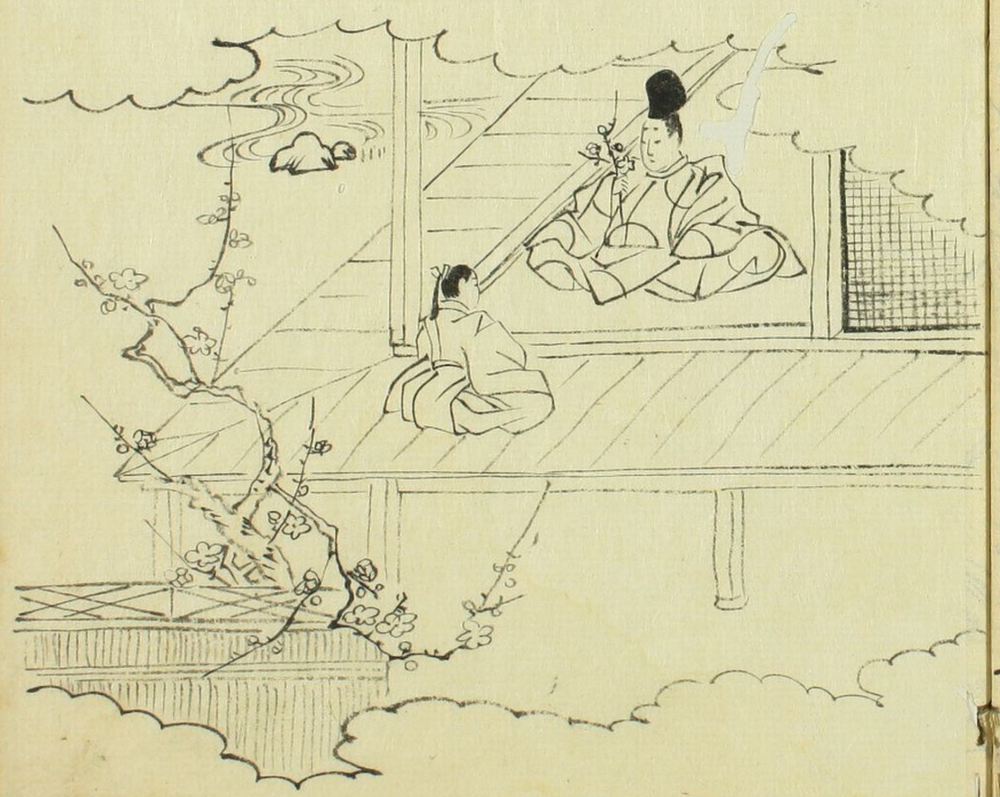
尾張名古屋住一原氏　友牧

月さへ　雲うと　ゆくれ　後



廿七 ゆふ[illegible]宮

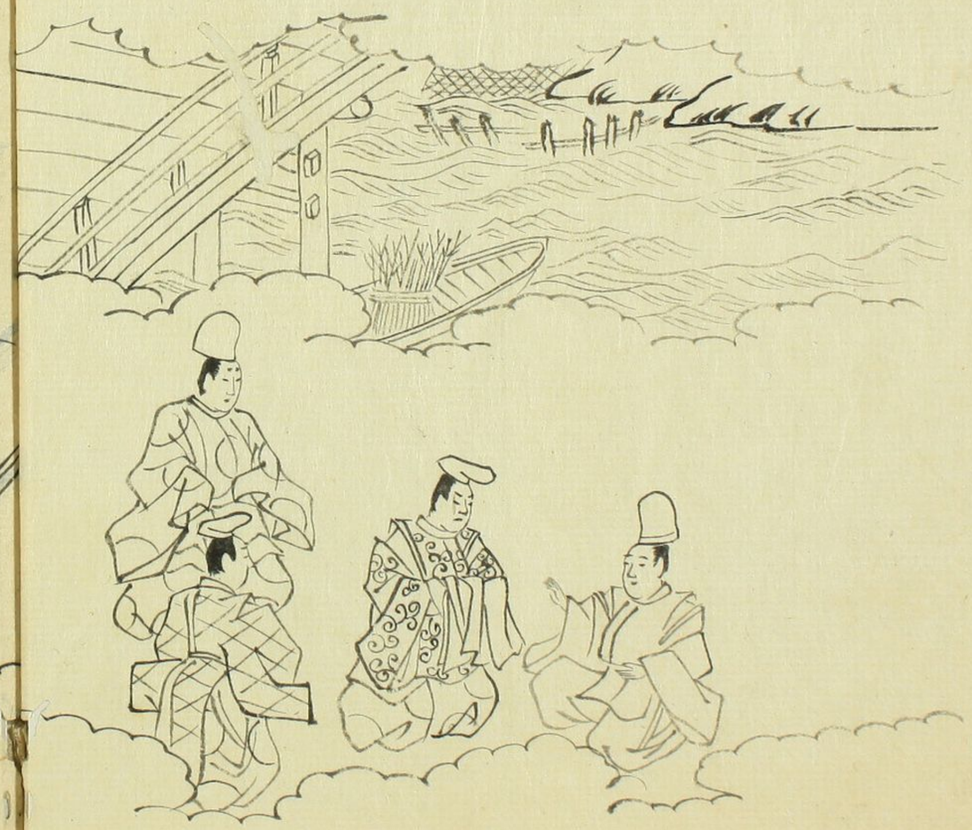
三の宮とハ[illegible]の[illegible]源氏の[illegible]



桐井氏今留毎地仙

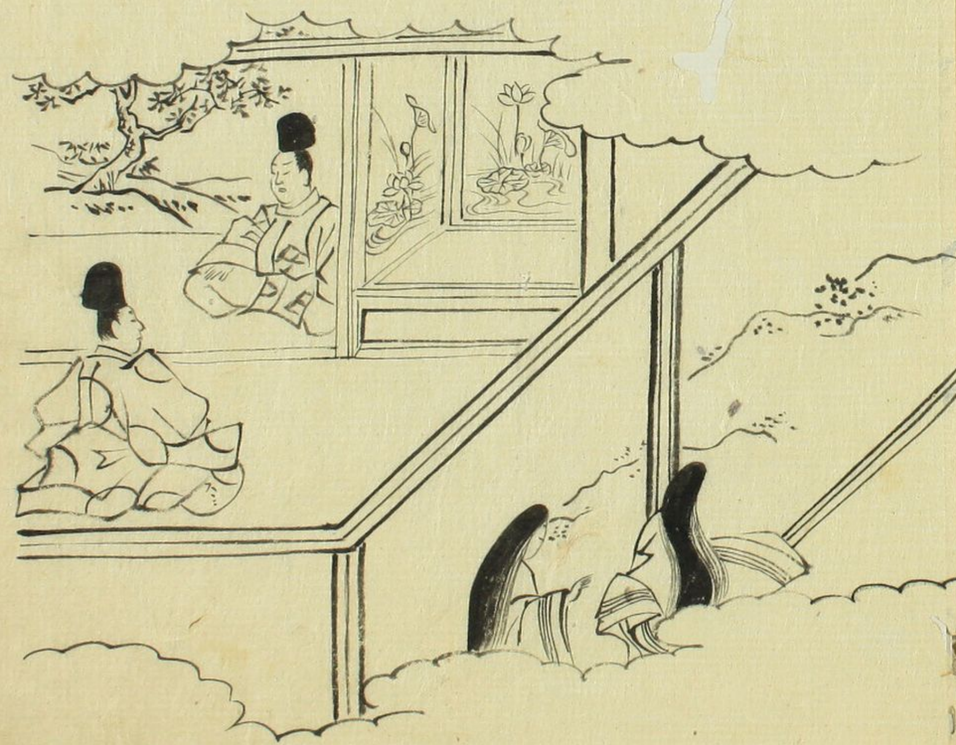
ちくしのくに
くるまのたゆうちかすへ
ゆくひ所のこと
ちくしのかんとくとて
ちくしにんさかのしつよ
神をあがめ給へば家ゆうつ
つかの門乃八の家源氏
まことに家をこうきしめ
家二人ありつゐに家ハ
位をのこりやそおも
いなせハ大ゐ殿をもおし
なりかしいなの陸
ちかいまさしめ給さは
とんありてさそよある
ものかり

松坂氏和年
ちくしめの　りもち
　　ゆ
　　ゆやとふ
川むら



ちかるうとと
はせ給ふ
くるまの大ゐの所
ちくしのくに
ちくしにんけんとく
ありまさ家ハ
家の門乃八の家源氏
家の大ゐまつそのよ
家の門乃八ゐ殿
おのれ大ゐ殿
本所乃とのへ家
まちうとこひなりてふ
くるまのそのこひ家
ちかのこと殿よりそ
てゐとものくめのふ
殿坂の家乃ゐ殿
ものこと殿ものこと

青木氏宗貞
ちくしの
ちくしの



あけまき

うちの宮人一めいに
はなをすひあこんをもと
ゆるしの大ぶりとくに
ゆんをとるあひて
あけまきをあり
ちさうと
もすいこあ
ちのしをこ
ゝうとあるん
あをうをはをる
あをしあへをりつき
四乃あのをよ
ちうをちさうと
をてもをワん
とあるのてんをらつ
ゆくうせのひき
名河氏京永
ちこ採人と
あけまきや
つりをれうち

はるをひ

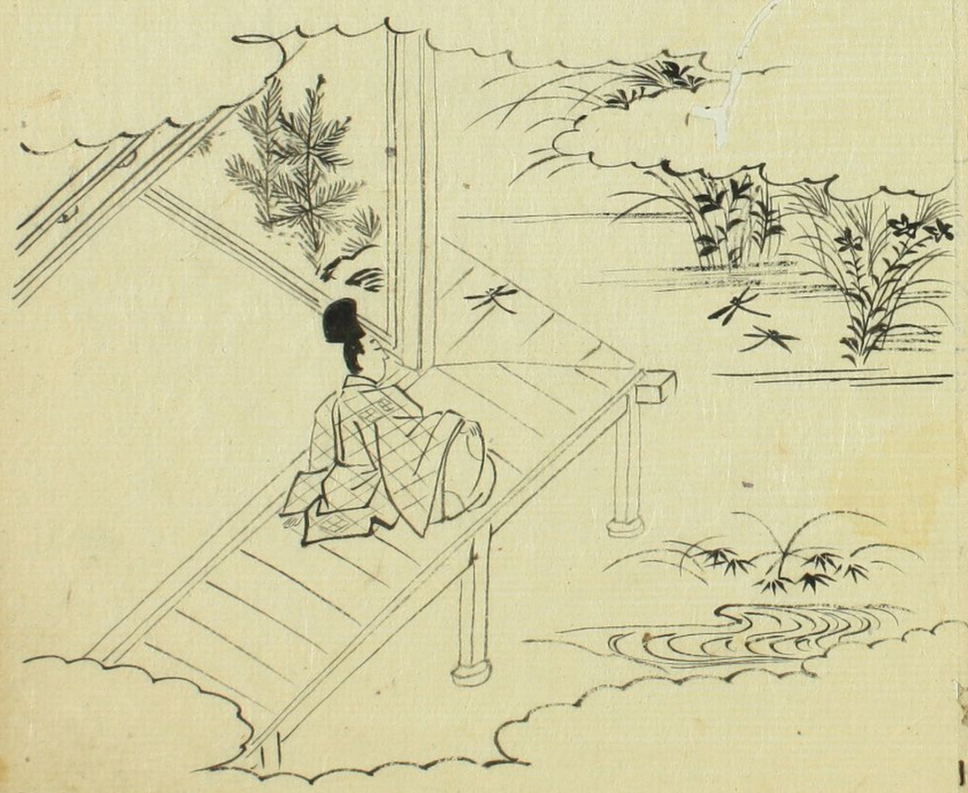
うちもれをのをあうて
今ををあるふをこり今
をりはまをおりをるを
ひをはをうゆ
あひをををれのひて
ひをうおせ西へをの
ちををさをひつ
ををうけあをこを今
をるをを
はをハをれをををん
をををのををに
つをををををををひ
ををんをををひを云

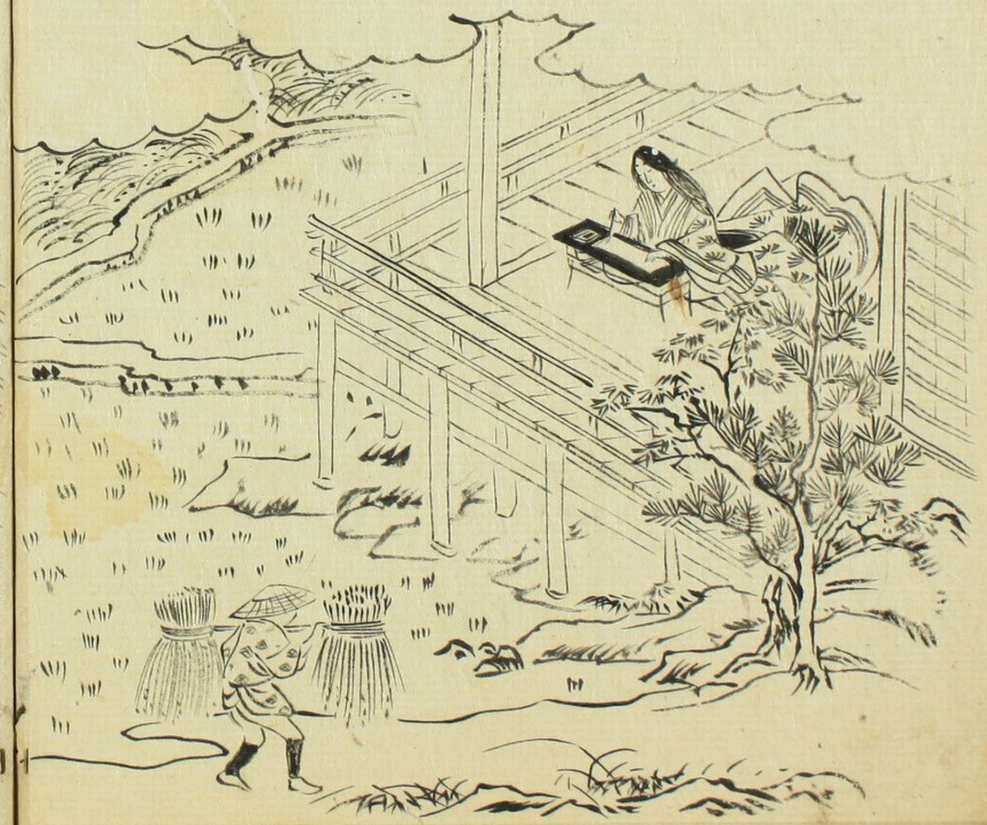
名氏定重

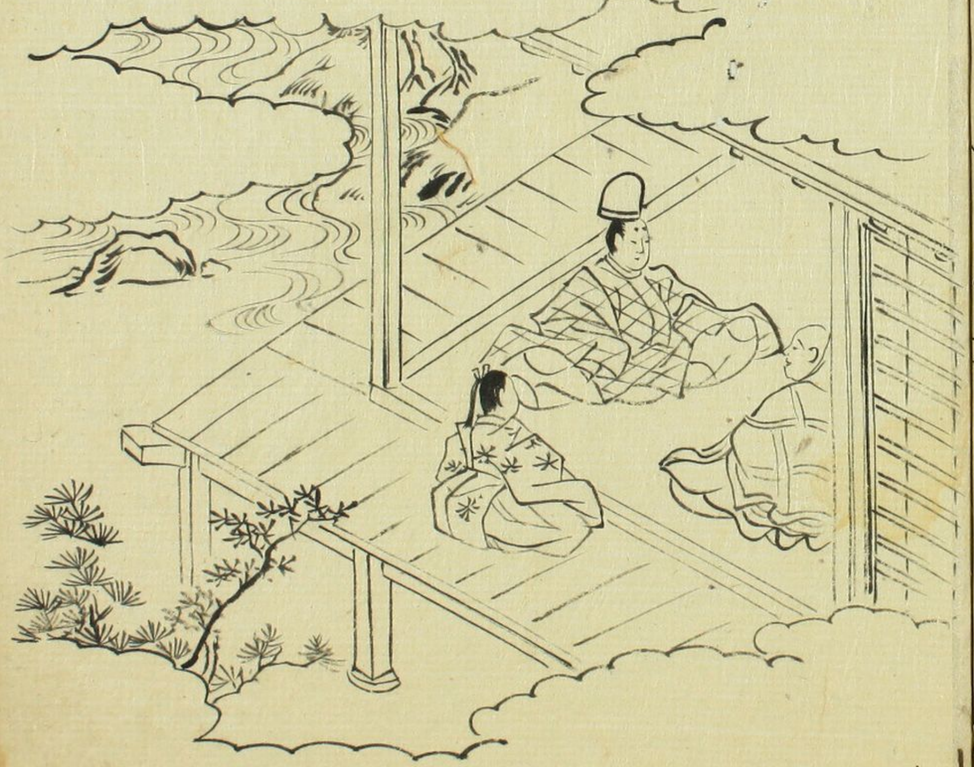
はるをいや　山乃
ほををを　ををを

中務武貞宜

村上氏令知







弘化四丁未孟秋

義孝女寫之并書

守通 巢雀

加之寫

祈年穀
奉幣